

# 足もとの文化を見つめる「中国文化資料講読」の授業取組

教育文化学部・石川三佐男

## 授業取組の背景

秋田の地には江戸期の漢詩文が数千篇伝わっている。この数量は江戸期の日本漢詩文の一割強を占めていると見込まれる。東北地方に限っても江戸期の漢詩文をこれだけ擁している地域は他に見あたらない。その意味でも秋田漢詩文は国内外に誇ることができる優れた教育資源、文化資産であるといえてよい。しかし欧米文化の摂取に走った明治以降、日本文学者や歴史学者はこれを取り上げず、中国文学者もほとんど扱ってこなかった。これは秋田の地においても同様であった。

授業担当者は貴重な文化資源、教育資源が放置されている現状を改善するために秋田大学に赴任した1990年1月以来、中国古典文学の教育と研究に携わるいっぽう、自らが拠って立つ足もとの文化を見つめる教育活動として「探訪 秋田の漢学」(注1)をまとめたり、地域住民の質問に応じたり、依頼に応じて掲額や掛け軸や襖の漢詩文を解説する支援を行ってきた。また二、三の授業を通じて受講生と共同の訳読作業を行い、「秋田県の優れた文化資産を顕彰し伝達する授業実践報告」と銘打って『江戸期の秋田漢詩文訳読』第一集(私稿本・2002年4月)、第二集(私稿本・2004年5月)を刊行し、県内の高等学校や中学校、また公共図書館等に無償で配付する取組を行ってきた(注2)。この間、授業担当者の意図するところを汲み取り、県内の高等学校の公開授業において生徒が主体となって上記『江戸期の秋田漢詩文訳読』第一集を活用する取組を展開したことは、願ってもないことであった(注3)。

フィールドインターンシップ型授業を銘打つ本授業はこうした取組の延長線上にある。

## 授業取組の具体例

江戸期の秋田漢詩文のなかに藩校明德館教授陣による「如斯亭記」九篇がある。これには筆写本のテキストが二種類あり、一は東山文庫「国学命題文稿 如斯亭記」(県公文書館蔵)。これには「天保七(1836)年丙申晩夏」の紀年がある。国学命題文稿とは秋田藩校明德館学長・奥山榕齋が「如斯亭」という課題を与え、教授陣九名がそれに応えて作った九篇の漢作文を意味する。一は真崎勇助の自筆校本『秋田文苑』(県公文書館蔵)巻五十七収録の「如斯亭記」。原本は東山文庫「如斯亭記」に拠っていると思われる。ちなみに「如斯亭記」九篇にはそれぞれ藩校明德館学長・奥山榕齋による甲・乙・丙・丁等の「評点」と「評語」が付けられ、評価に応じて報償品が授与されている。

なお「如斯亭記」に描かれる如斯亭は秋田市市街地の北東、秋田市旭川南町に所在し、江戸時代後期に藩主・佐竹氏によって整備された庭園、及び建造物から成り、昭和27(1952)年11月1日に秋田県史跡第一号に指定されたものである。庭園は遠州流、関東以北では無二の名園といわれる。特に庭園内の十五景勝は有名。所在地は秋田大学にほど近く、日々その前を通っている受講生も少なくない。ただしほとんど目にしたことがないというのが実情である。

授業の取組では受講生にまず如斯亭と「如斯亭記」の概要を解説したうえで、三名から四名で一組の訳読班、計五班を構成し、講読資料である「如斯亭記」九篇を配付して訳読担当範囲を定め、成果を毎週順次報告し合い、訳読の熟度を高めていくこととした。テキストは『秋田文苑』巻五十七に収録の「如斯亭記」を用い、東山文庫「如斯亭記」は必要に応じて適宜活用することとした。

## 授業取組における実地散策

「百聞は一見にしかず」の教えもあり、平成17年11月16日、授業を展開するに際して所有者に対し、如斯亭散策許可を依頼することとした。依頼書の内容は次の通り。

「如斯亭を守る会」代表 丸野内 胡桃 様

秋田大学教育文化学部教授・石川 三佐男

### 秋田県史蹟「如斯亭」散策許可願いについて

突然の依頼事で洵に恐縮に存じます。

小職はここ数年来、授業の一環として「秋田の優れた文化資産を顕彰し伝達する授業」に取り組み、その成果として受講生との共同作業として「江戸期の秋田漢詩文訳読」第一集、第二集を刊行しております。その第一集では益戸滄洲の「問槎紀行」と山縣百齡の「遊槎紀行」を扱い、第二集では平元謹齋の「槎湖紀行」他を扱いました。

これを承けてこのたび、藩校明德館教授陣による漢文作品「如斯亭記」九篇の訳読に着手しました。「百聞は一見にしかず」の教えもありますように、受講生たちに是非とも「如斯亭」の実地散策を体験させたく考えております。

つきましては次回授業実施時間帯に当たる11月21日（月）の午前9時から10時までの時間に、本学学生18名による「如斯亭」散策をご許可くださるよう謹んでお願いする次第です。

当日は学生指導上、小職も参加いたします。

当日は雨天の場合は中止とし、後日に実施したいと考えております。

「如斯亭記」訳読の成果は「如斯亭」にとってもきっと喜ばしいものになると考えております。

以上宜しくお願いいたします。

追伸：インターネット上に紹介されている龍居竹之介さんという方の「庭を大事にしよう」という図書情報に「如斯亭内に掲げられている如斯亭十五景を描いた古図」というのがあります。この古図は現在拝見することができるのでしょうか。併せてご教示いただければ洵に幸いです。

以上の依頼内容に対し、所有者の丸野内氏は挙げて対応してくださった。11月21日の当日は、庭園の案内だけでなく「如斯亭」の建造物開放や貴重資料の開示のほか、如斯亭の歴史や現代的課題等についても丁寧かつ詳しく説明してくださった。如斯亭を維持するための所有者の並々ならぬ熱意と苦勞に受講生一同は大いに感動したことであった（写真1、写真2、写真3）。

こうした実地散策体験を踏まえ、受講者による「如斯亭記」訳読作業は始まった。これには「如斯亭記」に係るさまざまな情報蒐集作業も伴った。持ち寄った情報や訳読資料には一定の検討を加え、必要に応じて修正原稿の提出を求めるなどした。

訳読作業を通じ「如斯亭記」の原文には句読点、書き下し文、語釈を施した。全体的には原文の文意を損なわないように注意を払っている。複数の受講生による訳読作業の性格上、誤読等がないとは限らないが、不備があればもちろん授業担当者の責任である。

「如斯亭記」の訳読成果全てを引用することは避け、ここにはその一部を紹介することに留めたい。受講生が訳読作業に取り組んだ際の息づかいが伝われば幸いである。



## 「如斯亭記」第一篇原文

丙申之歳、季夏之初、予与客會于城北如斯亭。蓋祝有年也。乃盈酒于樽、載魚于盤、与客更酌、欣然而樂。且此地、有嶺、臺、洞、缸、奇石、流水。又有青松佳木、夾路而生。殆如入仙境。名曰紅霞洞。其左曰靄然軒、其右曰夕陽坡也。軒西有臺、曰觀耕。蓋省農事也。路轉峰回而下、有缸、曰佩玉。上有清風嶺、下則玉鑑池。水衝石入池、曰超雪谿。有石青紫。其大可坐六七人、宛在水中央。名曰巨鼈嶋。其側有石、如虎臨水狀、名曰渴虎。蟠者如虬、踞者類豹。青松雜生其間。而弓字徑、逶迤而通、将至于亭。有橋、曰星槎。西下磴、則清流涓涓而瀉出。巖巖間曰幽琴澗。其側有茶室、曰清音亭。流水曰仁原泉。俯仰之間二峰、秀者曰仁山。蓋流水之原也。樹木繁茂鬱乎蒼々。西有射圃。公召近侍習其術、不忘武也。其側則旭川也。水清魚肥。夫君子之於山水、適然有得。而後極視聽之樂、致逸興之感。必有不能忘者、信可樂哉。故孔子歎水曰、逝者如斯夫、不舍昼夜往。歳先君作此亭。亦必有所感、而取名于茲乎。臺曰觀耕、泉曰仁原、其意可以知也。仰先君、博施仁務農、欲令後世之子々孫々、不忘此二義。故獵遊吟詠之際、亦之設此二者也、其錯国家於泰山之安者、爲之故也。客曰然矣。於是釀酒以樂、祝以有年、不知老之将至云爾。

## 「如斯亭記」第一篇書き下し文

丙申の歳、季夏の初め、予、客と城北の如斯亭に會す。蓋し祝するに年有り。乃ち酒を樽に盈たして魚を盤に載せ、客と更いに酌めば、欣然として樂し。且つ此の地に嶺、臺、洞、缸、奇石、流水有り。又た青松佳木の、路を夾みて生ずる有りて、殆ど仙境に入るがごとし。名づけて紅霞洞と曰ふ。其の左を靄然軒と曰ひ、其の右を夕陽坡と曰ふなり。軒の西に臺有り、觀耕と曰ふ。蓋し農事を省みるなり。路は嶺に轉じ、回りて下れば缸有り、佩玉と曰ふ。上に清風嶺有り、下れば則ち玉鑑池なり。水、石に衝りて池に入る、超雪谿と曰ふ。石の青紫なるもの有り、其の大きき六、七人を坐すべく、宛として水の中央に在り、名づけて巨鼈嶋と曰ふ。其の側らに石有り、虎の水に臨むがごとし、名づけて渴虎と曰ふ。蟠すること虬のごとく、踞すること豹に類たり。青松、其の間に雜生し、而して弓字徑、逶迤として通じ、将に亭に至らんとす。橋有り、星槎と曰ふ。西に磴を下れば、則ち清流涓涓として瀉出す。巖巖たる間を幽琴澗と曰ふ。其の側らに茶室有り、清音亭と曰ひ、流水を仁原泉と曰ふ。これを俯仰するの間、二峰あり、秀なる者を仁山と曰ふ。蓋し流水の原なり。樹木繁茂し、鬱乎として蒼々たり。西に射圃有り。公、近侍を召し、其の術を習はせ、武を忘れざらしむるなり。其の側らは則ち旭川なり。水清らかにして魚肥ゆ。夫れ君子の山水に於けるや、適然として得るもの有り。而る後、視聽の楽しみを極め、逸興の感を致せば、必ず忘るる能はざること有りて、信に楽しむべけん。故に孔子、水を歎じて曰く、逝く者は斯くの如きかな、昼夜を舍かずして往く、と。歳ごろ先君、此の亭を作るは、亦た必ず感ずる所有りて、名を茲に取るならんか。臺を觀耕と曰ひ、泉を仁原と曰ふは、其の意、以て知るべけん。そもそも先君、博く仁を施し、農に務め、後世の子々孫々をして、此の二義を忘れざらしめんと欲す。故に獵遊し吟詠するの際も、亦た此の二者を設くるなり。其の國家を泰山の安らかなるに錯かんとする者も、これがための故なり、と。客曰く、然り、と。是に於いて酒を釀むに楽しみを以てし、祝するに年有るを以てすれば、老いの將に至らんとするを知らず、と爾云ふ。(訳者注は割愛する)

本訳読成果は所与の作業を経て簡易な冊子にまとめ、平成18年3月1日に開催の「秋田大学特色GPフォーラム」において200余名の参加者に配付した。

## 如斯亭散策を体験した受講生の声

○今日はとても寒かったものの天候に恵まれ、如斯亭に行くことができた。大学のこんなそばに、しかも所有者が普段生活していると伺ったが、とても趣があつて厳かな場所であつた。昔の秋田藩主の気分を味わうことができた。(M.T)

○秋田の、しかも大学のすぐ近くに、こんなにも趣がある庭園があつたなんて本当に驚きました。雪見灯籠や亀石など間近に見てため息が出ました。建物の中の造りについても解説していただいて、とても貴重な体験ができました。(M.T)

○如斯亭は通学路にあるにもかかわらず、私はその存在に気づかずにいた。三百年前の秋田城主・佐竹のお殿様が座った場所に腰を下ろすと、なんだか不思議な感じがしました。(A.U)

○大学でただ先生の話の聞いているだけでなく、自分の眼で見たり自分の手で作業をすることによって、いろいろな情報がリンクし、より分かりやすい授業であつたと思います。(K.M)

○今回実際に如斯亭に行ってみたことによって、授業で学んだ現場の雰囲気などが直に感じられた。秋田の街中に別世界のような空間があることにとても趣を感じた。(M.Y)

○緑に囲まれた非常に綺麗な庭園でした。しかし所有者の丸野内さんがおっしゃっていたように、堰から水を引けなくなった現在、ポンプで水を流さないと庭園の表情が活かないのはなんとも残念なことです。如斯亭記の訳読作業に入る前に実際に見ていろいろ知ることができ、とてもよかったです。(Y.M)

○第一回の授業時に読んだ内容と配付された庭園の図と、それから目の前に実際にある景色とが一致しました。実際に見ながら訳読を進めると頭に入りやすいと思えました。(R.Y)

○新聞の如斯亭の写真と実際の様子は少し違うように思えた。思ったより庭園は小さかつたが全体を散策することができ、また建物の中に入り、説明を聞くことができ、楽しかつた。四季折々に訪れれば、その季節ごとに木や池を楽しむことができそうだと思つた。(M.O)

○すぐ近くには道路やアパートと現代的なものが迫っているにもかかわらず、如斯亭内には、そんなものを消してしまうくらい独特な雰囲気があり、すばらしい感じがした。決して広くない庭園の中いっぱいに見るべき貴重なものが詰まっていることにとても感動した。(A.S)

○漢詩文だけでは伝わらない自然と融合している如斯亭を感じる事ができて、とてもうれしく思つた。また地域開発により、如斯亭の姿が徐々に失いつつあると聞いて、胸が痛んだ。足もとにある文化遺産をいつまでも守っていきたくて改めて思つた。(M.K)

○如斯亭がこんなに近くにあつたのに、今まで行つたことがなかつたのを後悔している。今度からは折々の季節に足を運んでみたいと思う。丸野内さんの貴重なお話を聞けたことは何よりもよかつたと思う。(N.N)

○秋大の近くに如斯亭のような所があるとは全然知らず、実際に行つてみて感動した。塀を越えれば自動車が行き交う現代の世界であるのだが、如斯亭の中には神秘的な雰囲気が漂い、異界のようであつた。歴史ある庭園であるがかえって新鮮に感じ、朝からとても清々しい気分になれた。(Y.Y)

○如斯亭に行つてみて、風情がある、趣があるというのはこういうことだと感じた。苔が生えているのがかえって美しさを引き立てているような気がした。水の中に建物があつたり、庭に池があつたりと、庭園には水があることが大切だと感じた。庭園を維持するにはさまざまな苦勞があることを知つたが、貴重ですばらしいものなので、ずっと残してほしい。(M.S)

(以上は毎回授業で活用の「学習記録—今日の授業で何を学びどんな問いを發したか—」による)

## 取組成果の社会への還元と効果

本授業取組における「如斯亭記」の訳読成果は平成18（2006）年3月に環境省に報告された「如斯亭の歴史・庭園および建造物群に関する基礎調査報告書」（監修：田中哲雄、発行：丸野内胡桃）に採択される幸運に恵まれた。この報告書には、上記「原文」と「書き下し文」と「訳者注」が附され、また「如斯亭記」九篇の一（秋田藩校明德館教授・小瀬伊実）の訳読資料、平成17年度秋田大学教育文化学部「中国文化資料講読Ⅳ」受講生一同による訳読（監修、石川三佐男）と記されている。

こうした秋田大学での教育的・文化的取組、また庭園の所有者や関係者の涙ぐましい努力によって、「如斯亭」は平成19年2月、県の史跡指定の役目を終えて、国の名勝指定を受ける運びとなった。このことは本報告書にも銘記してよいことであろう。

## まとめ

本学のフィールドインターンシップ型授業は地域的課題を受講生と授業担当者が共同で取り上げて大学で知的再構築を図り、その成果を社会に還元することに特色がある。ただしこれは教育方法であって、目指すところは地域活性型リーダー・地域交流型リーダーの養成にあることは説明を要さない。

本授業の取組成果を地域社会に還元し、社会の振興や発展にいささかなりとも貢献できたことは受講生ともども悦ばしいことである。これは「中国文化資料講読」の授業だけでなく「日本秋田漢詩文」の授業においても同様である。「漢文の訳読作業にかなりの困難は伴ったものの達成感を味わうことができた」とは受講生の大方の声である。授業担当者からすると、受講生はその分、確実に成長を遂げていると見てとれた。

以上述べてきたフィールドインターンシップ型授業は受講生の潜在的資質を掘り起こし、地域リーダーとしての意識と能力を高めるうえで極めて有効である。受講生のなかにはその問題意識や足もとの文化を見つめる必要性に深く目覚めた者も少なくない。

「自らが拠って立つ足もとの文化にしっかり向き合わないで他の諸地域の文化にまともに向き合うことができるか」というのは授業担当者の持論だが、受講者の多くがこうした考え方に共鳴し、立派な地域リーダーとなって社会を大いに盛り上げてくれることを願ってやまない。

## 注記

（注1）本論考は『新しい漢文教育』第23号（1996年11月）所収。

（注2）この取組は2004年7月14日付「秋田魁新報」に「江戸期の秋田漢詩文『槎湖紀行』、「秋大教育文化学部の学生ら訳読の成果を刊行」、県内全高校、中学校へ贈呈、郷土の文化を伝える」の見出しで大きく報道された。これを承けて同8月11日付「世界日報」でも同様の報道がなされた。

（注3）この公開授業は全国漢文教育学会第22回（秋田）大会の一環として開催されたものである。会場校の授業担当者・森元弘毅氏による実践研究報告は「郷土の優れた漢詩文の『魅力ある教材化』に向けた一試案—江戸期の秋田漢籍『問槎紀行』（益戸滄洲）を読む—」（『新しい漢文教育』第43号・2006年）に詳しい。